

青森県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

制 定 平成12年 3月22日

最終改正 平成29年 5月15日

第1 持続性の高い農業生産方式の導入について

農業は、食料供給機能のほか、国土や環境の保全といった多面的機能を有しており、このような機能を将来にわたって発揮していくことが必要であるが、農業生産面では全国的に肥料や農薬への過度の依存による環境汚染や地力低下が問題となってきた。

一方では、有機農産物等に対する消費者や実需者のニーズが高まってきており、国際的にも化学肥料・化学合成農薬の使用を低減し、環境に配慮する持続的な農業の推進が重視されている。

このため、国では、たい肥等を活用した土づくりと化学肥料・化学合成農薬の使用の低減を一体的に行う「持続性の高い農業生産方式」の普及促進や、それに取り組む農業者に対する支援措置を内容とした「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（平成11年法律第110号、平成25年11月22日最終改正）」（以下「持続農業法」という）を施行し、その取組を推進しているところである。

本県では、安全・安心で良質な農産物を安定的に生産・供給するため、県内すべての生産者が「健康な土づくり」に取り組むことを目指す「日本一健康な土づくり運動」を平成19年度から展開し、化学肥料や化学合成農薬を低減する環境にやさしい農業技術の普及拡大などに取り組んできている。また、新たなステージに入った「攻めの農林水産業」の中で、農業生産の基本となる健康な土づくりや環境にやさしい農業の推進などにより、安全・安心を支える産地体制を強化することとしている。

これらの状況を踏まえ、県は、持続農業法第3条に基づく「青森県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針」を定め、本県の農業者が導入すべき農業生産方式等を具体的に提示し、従来から進めてきた、健康な土づくりを基本とした環境にやさしい農業を更に推進していくものとする。

第2 持続性の高い農業生産方式に係る技術

「持続農業法」における「持続性の高い農業生産方式」とは、下表の「区分」欄に掲げる3つの技術全てを用いて行われるものをいう。

それぞれの区分における技術の内容は、「技術名」欄に掲げたものであり、そのうち、第3において作物別に示す技術のうち1つ以上を行うものとする。

<持続性の高い農業生産方式に係る技術>

区 分	技 術 名	概 要
1 たい肥その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果が高い技術	(1)たい肥等有機質資材施用技術	土壌有機物含有量、可給態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、たい肥その他の有機質資材であって炭素窒素比がおおむね10から150の範囲にあるものを農地に施用する技術
	(2)緑肥作物利用技術	土壌有機物含有量、可給態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、緑肥作物を栽培して、農地にすき込む技術
2 肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高い技術	(1)局所施肥技術	肥料を作物の根の周辺に集中的に施用する技術
	(2)肥効調節型肥料施用技術	肥料取締法(昭和25年法律第127号)第2条第2項に規定する普通肥料のうち、アセトアルデヒド縮合尿素、イソブチルアルデヒド縮合尿素、オキサミド、石灰窒素、被覆加里肥料、被覆窒素肥料、被覆複合肥料、ホルムアルデヒド加工尿素肥料若しくは硫酸グアニル尿素、これらの肥料の一種以上が原料として配合されるもの又は土壌中における硝酸化成を抑制する材料が使用されたものを施用する技術
	(3)有機質肥料施用技術	有機質(動植物質のものに限る。)を原料として使用する肥料を施用する技術
3 有害動植物の防除に関する技術であって、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高いもの	(1)温湯種子消毒技術	種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術
	(2)機械除草技術	有害植物を機械的方法により駆除する技術
	(3)除草用動物利用技術	有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いを行う技術
	(4)生物農薬利用技術	農薬取締法(昭和23年法律第82号)第1条の2第2項の天敵であって、同法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを利用する技術
	(5)対抗植物利用技術	土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術
	(6)抵抗性品種栽培・台木利用技術(抵抗性品種・台木の利用技術)	有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術
	(7)天然物質由来農薬利用技術	有効成分が化学的に合成されていない農薬として農林水産大臣が定めるものを利用する技術

	(8) 土壌還元消毒技術	土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術
	(9) 熱利用土壌消毒技術	土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術
	(10) 光利用技術	有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術
	(11) 被覆栽培技術	農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術
	(12) フェロモン剤利用技術	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であって、農薬取締法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを使用する技術
	(13) マルチ栽培技術	土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術

- ※ 持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律施行規則より
- ※ 技術の導入に当たっては、「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律の施行について（平成11年10月25日 11農産第6789号農産園芸局長通知）」の別記「法第2条に基づき農林水産省令で定める技術の具体的内容及び導入上の留意事項について」を遵守すること。

第3 持続性の高い農業生産方式

1 水稲

(1) 県下全域（ただし、山間冷涼地帯、海岸冷涼地帯、下北外海地帯を除く）

水田土壌での有機物やけい酸の含有量が少なくなっており、土壌診断に基づく土づくり肥料の適正施用と、完熟したたい肥の施用を基本に、土壌条件の良い水田での秋の稲わらすき込みを進めて水田土壌の地力向上を図るとともに、側条施肥や肥効調節型肥料施用技術、有機質肥料施用技術を組み合わせ、化学肥料の削減を含めた施肥の合理化を図る。

また、土づくり、発生予察情報や自らの観察に基づく病害虫の適正防除を徹底するとともに、機械除草や温湯種子消毒技術の利用等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり1 tを基本として施用する。 ○稲わらをすき込む場合は、腐熟を促進するため、秋起こしを実施する。 ○輪作等で前作が小麦の場合は、麦わらのすき込みを行う。 	
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○側条施肥による局所施肥を行う。 ○被覆肥料など肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) ○計画的なブロックローテーションを行い、水稲の減肥を行う。 	
化学合成農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術 ○除草用動物利用技術（アイガモなど） ○生物農薬による種子消毒技術 ○抵抗性品種の利用技術（「まっしぐら」、「あかりもち」、「ゆきのはな」等） ○マルチ栽培技術（米ぬか、紙マルチ） 	<ul style="list-style-type: none"> 病害(いもち病、ばか苗病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病) 雑草 雑草 病害(ばか苗病等) 病害(いもち病) 雑草
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・稲わらのすき込みは、「稲作改善指導要領の地帯別稲わら施用基準」に基づいて施用し、泥炭や排水の改良されていない黒泥、強グライ土壌などでは実施しない。 ・稲わらは、焼却せずに有効活用に努める。 ・農道・畦畔等の管理は機械除草を基本とし、法面被覆植物の導入に努める。 ・病害虫防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(2) 山間冷涼地帯、海岸冷涼地帯、下北外海地帯

本地域は、他地域に比較して気象条件が厳しく、作柄の不安定な地域であり、稲わらのすき込みや肥効調節型肥料の全量施肥技術は、作柄の不安定を助長する恐れがあることから、土壌診断に基づく土づくり肥料の適正施用と、完熟したたい肥の施用を基本に、側条施肥技術や有機質肥料施用技術を組み合わせることにより、化学肥料の削減を含めた施肥の合理化を図る。

また、土づくり、発生予察情報や自らの観察に基づく病害虫の適正防除を徹底するとともに、機械除草や温湯種子消毒技術の利用等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材施用技術	○完熟たい肥10a当たり0.5～1 tを基本として施用する。	
化学肥料低減技術	○側条施肥による局所施肥を行う。 ○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) ○計画的なブロックローテーションを行い、水稻の減肥を行う。	
化学合成農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術 ○除草用動物利用技術 (アイガモなど) ○生物農薬による種子消毒技術 ○抵抗性品種の利用技術 (「まっしぐら」、「あかりもち」、「ゆきのはな」等) ○マルチ栽培技術 (米ぬか、紙マルチ) 	<ul style="list-style-type: none"> 病害(いもち病、ばか苗病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病) 雑草 雑草 病害(ばか苗病等) 病害(いもち病) 雑草
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・気象変動が大きく、作柄の不安定な地域であるので、施肥法は穂肥体系とする。 ・稲わらは、焼却せずに有効活用に努める。 ・農道・畦畔等の管理は機械除草を基本とし、法面被覆植物の導入に努める。 ・病害虫防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

2 畑作物・工芸作物

(1) 小麦

○県下全域

土壌の保水力を高め、登熟期間の栄養条件を良好とするため、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草、病虫害防除は連作の回避、排水対策、適正窒素施肥等の耕種的防除及び発生予察情報の利用や自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 1 t を基本として施用する。 または、収穫後に麦わらのすき込みを行う。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 ○輪作等で前作が水稻の場合は、稲わらのすき込みを行う。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用とする。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術（耕起直後は種等） ○抵抗性品種の利用技術（「ネバリゴシ」, 「ゆきちから」） ○天然物質由来農薬利用技術 	<ul style="list-style-type: none"> 病害(裸黒穂病、なまぐさ黒穂病) 雑草 病害(赤さび病、うどんこ病) 病害(うどんこ病、赤さび病、赤かび病)
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・麦わらをすき込む(600kg/10a)場合、腐熟促進のため石灰窒素(窒素成分で4kg/10a)をほ場全体に均一に散布する。 ・十分な排水対策を行う。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(2) だいでず

○県下全域

土壌適応性の広い作物であるが、安定多収を得るためには、耕土が肥沃で深く、かつ排水・保水の良い土壌が好適であることから、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、肥効調節型肥料等との組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草、病虫害防除は連作の回避、排水対策、病害被害茎葉の処分等の耕種的防除及び発生予察情報の利用や自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり1 tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p> <p>○輪作等で前作が水稻または小麦の場合は、稲わらまたは麦わらのすき込みを行う。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術 (ハスモンキラールの利用)</p> <p>○対抗植物利用技術(クリムソクローバ、クロタラリアの利用)</p> <p>○抵抗性品種の利用技術(「オクシロメ」)</p> <p>○マルチ栽培技術 (麦のリビングマルチ等)</p>	<p>雑草</p> <p>害虫(ハスモンヨトウ)</p> <p>病虫害(ダイズシストセンチュウ)</p> <p>病虫害(ダイズシストセンチュウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・地力(土壌肥沃度)に応じて施肥量を加減する。 ・十分な排水対策を行う。 ・株間除草や中耕・培土は土壌の状態を考慮して適期に行う。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(3) あずき

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用する。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○機械除草技術	雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・十分な排水対策を行う。 	

(4) そば

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○機械除草技術（耕起直後は種等） ○生物農薬利用技術 （ハスモンキラールの利用）	雑草 害虫（ハスモンヨトウ）
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・十分な排水対策を行う。	

(5) なたね

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

過度の窒素施用は倒伏を招き、菌核病の発生を助長することから注意する。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○機械除草技術	雑草
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・十分な排水対策を行う。	

(6) はとむぎ

○県下全域

たい肥の施用等による地力の維持に努めるとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり1tを基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○温湯種子消毒技術 ○機械除草技術	病害(黒穂病) 雑草
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。	

(7) アメリカホドイモ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、病虫害防除に当たっては、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本とする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術	雑草 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・十分な排水対策を行う。 	

(8) 葉たばこ

○県下全域

葉たばこ生産地帯は、ほぼ淡色黒ボク土壌や粗粒黒ボク土壌に属しているため、稲わら・落ち葉やたばこ残幹を原料とした完熟たい肥の施用や緑肥のすき込みを行い、土壌の通気性、排水性、保水性等の改善を図るとともに、中層条肥を行い施肥効率と収量の向上を図る。

また、化学合成農薬の散布は、葉たばこの香喫味に及ぼす影響が大きいことから、機械除草とマルチ栽培による除草剤の削減を基本として、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり1.5tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入する。 休作期間にライムギなどの緑肥を作付けし、すき込みを行う。 定植までに十分腐熟するようすき込み時期に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○施肥を条肥に中層条肥する。 (黒ボク土壌の場合、15～20cmの中層65～70%、表層30～35%を基準とする。)</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・中層条肥は、非火山灰系土壌の場合、中層80～85%、表層15～20%を基準とする。 ・十分な排水対策を行う。 	

3 野菜

(1) だいこん

○県下全域

微量要素欠乏による生理障害が発生しやすいので、土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つ必要がある。そのため、たい肥の施用による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり2 tを基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ハイオーツ等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(シルバーマルチ) ○被覆栽培技術 (トンネル栽培、べたがけ栽培等) ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 病虫害(軟腐病、コナガ、アオムシ) 病虫害(ネグサレセンチュウ類) 病害(萎黄病、軟腐病) 害虫(アオムシ、コナガ) 病虫害(モザイク病、アブラムシ類) 害虫(コナガ、アオムシ、キスジノミハムシ等) 害虫(コナガ) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・排水不良畑は、生理障害の発生を招きやすいことから栽培を避ける。 ・作型により有機質肥料の肥効発現が異なるので注意する。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。 	

(2) ばれいしょ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つため、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、耕種的、生物的防除の積極的な導入、発生予察情報の利用や生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり1.5tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術(普通栽培)</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○抵抗性品種の利用技術</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>○フェロモン剤利用技術</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病害虫(軟腐病、ハスモンヨトウ、コガネムシ類幼虫)</p> <p>病害虫(疫病、ジャガイモシストセンチュウ)</p> <p>病害虫(ウイルス病、アブラムシ類)</p> <p>害虫(ヨトウガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・種いもの更新を行う。(採種ほ産のものを使用する。) ・病害虫防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(3) にんじん

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、対抗植物利用等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり2 tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイオーツ等の利用)</p> <p>○被覆栽培技術 (トンネル栽培、べたがけ栽培等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病害虫(軟腐病、ヨトウムシ)</p> <p>病害虫(ネグサレセンチュウ類)</p> <p>害虫(ヨトウムシ類)</p> <p>害虫(ヨトウガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・レタス、はくさい、キャベツと共通する病害虫が少ないので、積極的に輪作を取り入れる。 	

(4) ごぼう

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、被覆栽培等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり1.5tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術	雑草
	○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ハイオーツ等の利用)	病虫害(ネグサレセンチュウ類)
	○被覆栽培技術(べたがけ栽培、トンネル栽培等)	害虫(ケムシ類、アブラムシ類)
○マルチ栽培技術	雑草	
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・土壌病害の発生が懸念されることから、連作を避け、良質安定生産のための輪作を行う。 	

(5) かぶ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、被覆栽培、フェロモン剤利用等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイ オーツ等の利用)</p> <p>○抵抗性品種の利用技術</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>○被覆栽培技術(べたがけ栽培等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術 (コナガコン等の利用)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病虫害(軟腐病、コナガ、 ヨトウムシ、アオムシ)</p> <p>病虫害(ネグサレセンチュウ ウ類)</p> <p>病害(根こぶ病)</p> <p>害虫(ハモグリバエ類)</p> <p>病虫害(モザイクビヨウ、 アブラムシ類)</p> <p>害虫(コナガ、キスジノミ ハムシ等)</p> <p>害虫(コナガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。 	

(6) ながいも・やまといも

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、対抗植物利用等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、発生予察情報の利用や自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○萌芽期施肥及び追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○フェロモン剤利用技術</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>害虫(ヤマノイモコガ)</p> <p>害虫(ハダニ類)</p> <p>害虫(シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・土壌病害の発生が懸念されることから、連作を避け、良質安定生産のため、ねぎやにんにく等の輪作を行う。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(7) にんにく

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草や生物農薬の利用等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、発生予察情報の利用や自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり2 tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○基肥を畦施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○光利用技術(光反射資材(光反射シート、光反射資材繊維ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病害虫(軟腐病、ネギコガ)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>病害虫(さび病、葉枯病、ネギコガ等)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<p>・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。</p> <p>・病害虫防除は、発生予察情報を活用して、適期防除、散布回数の削減に努める。</p>	

(8) キャベツ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥等施用技術を基本とし、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草、生物農薬の利用、被覆栽培、フェロモン剤利用等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、発生予察情報の利用や自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイ オーツ等の利用)</p> <p>○抵抗性品種の利用技術</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>○被覆栽培技術(トンネル栽培等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(交信攪乱剤の利用)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病虫害(軟腐病、コナガ、 アオムシ、ヨトウムシ)</p> <p>病虫害(ネグサレセンチュ ウ類)</p> <p>病害(萎黄病、黒腐病、根 こぶ病)</p> <p>害虫(アオムシ、コナガ、 ヨトウムシ)</p> <p>害虫(アブラムシ類)</p> <p>害虫(コナガ、アオムシ等)</p> <p>害虫(コナガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。 	

(9)はくさい

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥等施用技術を基本とし、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草、生物農薬の利用、被覆栽培、フェロモン剤利用等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、発生予察情報の利用や自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイ オーツ等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(シルバーマルチ) ○被覆栽培技術(トンネル栽培等) ○フェロモン剤利用技術(交信攪乱剤の利用) ○マルチ栽培技術	雑草 病虫害(軟腐病、コナガ、 アオムシ、ヨトウムシ) 病虫害(ネグサレセンチュ ウ類) 病害(根こぶ病、軟腐病、 ウイルス病) 害虫(アオムシ、コナガ、 ヨトウムシ) 害虫(アブラムシ類) 害虫(コナガ、アオムシ等) 害虫(コナガ) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。 	

(10)ねぎ

○県下全域

耕土が深く、肥沃で適度な通気性と排水・保水性の良好な土壌が適するため、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料等の施用を組み合わせた局所施肥で施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草を基本とし、病虫害防除は連作の回避、病気伝染源となる収穫残さの処理等の耕種的防除、生物農薬の利用、発生予察情報の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術(太陽熱、熱水・蒸気) ○光利用技術(UVカットフィルム) (ハウス栽培での光反射資材 (光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培)	雑草 病虫害(軟腐病、ヨトウムシ) 病害(さび病、黒斑病、べと病) 害虫(アザミウマ類) 病害(萎凋病) 害虫(ネギハモグリバエ、アザミウマ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウマ類) 病虫害(べと病、さび病、黒斑病、ネギコガ等) 害虫(シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ)
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウスは雨よけになるので病害発生を抑制するが、かん水や温度管理には注意する。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(11) レタス

○県下全域

土壌の排水・保水・通気性改善のため、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は排水や連作回避等の耕種的防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○光利用技術(シルバーマルチ) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培) ○マルチ栽培技術 	雑草 病虫害(軟腐病、灰色かび病、ヨトウムシ) 病害(根腐病、腐敗病、レタスモザイクウイルス(LMV)) 害虫(アブラムシ類) 害虫(ヨトウガ、オオタバコガ) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・マルチ栽培では全量基肥とし窒素施用量を減肥する。 	

(12) ほうれんそう

○ 県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、被覆栽培やマルチ栽培による耕種的防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり2.5tを基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術(太陽熱) (熱水・蒸気) ○光利用技術(シルバーマルチ) (UVカットフィルム) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織 ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培) ○マルチ栽培技術	害虫(ヨトウムシ) 病害(べと病、萎凋病) 害虫(アシグロハモグリバエ) 病害(萎凋病、株腐病) 病害(萎凋病) 害虫(アブラムシ類) 病害虫(萎凋病、アブラ ムシ類) 害虫(アブラムシ類、アザ ミウマ類) 害虫(ヨトウムシ類、アブ ラムシ類) 害虫(ヨトウガ、ハスモン ヨトウ) 雑草
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して施肥計画を立てる。 ・周年的な連続作付けの場合、たい肥や化学肥料等は各作に施用しない。	

(13) しゅんぎく

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、被覆栽培やマルチ栽培による耕種的防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした病害虫防除により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり3 tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用する。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>害虫(ヨトウムシ)</p> <p>害虫(アブラムシ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>害虫(ヨトウムシ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(ヨトウガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して施肥計画を立てる。 ・周年的な連続作付けの場合、たい肥や化学肥料等は各作に施用しない。 	

(14) ブロッコリー

○県下全域

生育初期から中期にかけて肥料切れを起こさず充実した株になるような施肥体系が必要であることから、完熟たい肥を施用して土壌の肥沃度を高め、通気性・排水性を改善し、肥効調節型肥料等の施用を組み合わせることにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、連作の回避等の耕種的防除、微生物剤利用による病害虫防除、マルチ栽培や中耕による雑草防除の徹底等、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイオーツ等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(シルバーマルチ) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培) ○マルチ栽培技術	雑草 病害虫(軟腐病、コナガ、アオムシ、ヨトウムシ) 病害虫(ネグサレセンチュウ類) 病害(萎黄病) 害虫(アオムシ、コナガ) 害虫(アブラムシ類) 害虫(コナガ、ヨトウガ) 雑草
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・マルチ栽培では、原則として全量基肥とする。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。	

(15) スイートコーン

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>害虫(オオタバコガ等)</p> <p>害虫(アブラムシ類)</p> <p>害虫(オオタバコガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<p>・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。</p> <p>・マルチ栽培では、原則として全量基肥とする。</p>	

(16) アスパラガス

○県下全域

アスパラガスは、深根性作物で多数の貯蔵根が密に存在することから、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、秋の枯葉期に葉を刈り取り処分する耕種的防除を徹底するとともに、機械による雑草防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 4～5 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○点滴かん水同時施肥を行う。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○光利用技術(光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>害虫(ヨトウガ)</p> <p>害虫(アザミウマ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>害虫(ヨトウガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・畑の周辺を清掃し、害虫の越冬場所を作らないようにする。 	

(17) すいか

○県下全域

多湿に弱く、通気性の悪い土壌では茎葉の衰弱が著しいので、たい肥の施用等により土壌理化学性の改善に努めるとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病害虫防除は連作の回避、マルチ栽培等の耕種防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○抵抗性品種・台木の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置) ○被覆栽培技術(雨よけ栽培、ハウス栽培等) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培) ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 病害虫(うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、ウリノメイガ) 病害(つる割病) 害虫(ハダニ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウマ類) 病害(炭疽病、つる枯病) 害虫(オオタバコガ) 雑草、病害(べと病、炭疽病)
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・育苗やハウス栽培では、出入口やサイドに防虫網を用いる。 	

(18)メロン

○県下全域

根の酸素要求度の高い作物であることから、有機質資材の施用により土壌の排水性・通気性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病害虫防除は連作の回避、マルチ栽培等の耕種的防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり2 tを基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素成分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 (天敵、微生物剤等の利用) ○抵抗性品種・台木の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○土壌還元消毒技術 (ハウス栽培等) ○光利用技術 (光反射資材 (光反射シート、光反射資材交織ネット等) の設置) ○被覆栽培技術 (雨よけ栽培、ハウス栽培等) ○フェロモン剤利用技術 (露地栽培) ○マルチ栽培技術 	<p>雑草 病害虫(うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、ウリノメイガ)</p> <p>病害(つる割病、えそ斑点病)</p> <p>害虫 (ハダニ類)</p> <p>病害(つる割病)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>病害(炭疽病、つる枯病)</p> <p>害虫(オオタバコガ)</p> <p>雑草、病害(べと病、炭疽病)</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・育苗や半促成栽培・抑制栽培では、ハウス出入口やサイドに防虫網を用いる。 	

(19) トマト（ミニトマトを含む）

○県下全域

耕土が深く、腐植に富み、排水のすぐれた土壌が好適であることから、たい肥の施用等により土壌理化学性の改善を図るとともに、点滴かん水同時施肥や肥効調節型肥料等の施用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は連作の回避、マルチ栽培等の耕種的防除、生物農薬の利用及び自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり2～3 tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○点滴かん水同時施肥を行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術 (天敵、微生物剤等の利用)</p> <p>○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイオーツ等の利用)</p> <p>○抵抗性品種・台木の利用技術</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○土壌還元消毒技術</p> <p>○熱利用土壌消毒技術(太陽熱) (熱水・蒸気)</p> <p>○光利用技術(非散布型農薬含有テープ) (黄色灯) (粘着資材) (シルバーマルチ)</p>	<p>雑草</p> <p>病虫害(灰色かび病、オンシツコナジラミ、オオタバコガ等)</p> <p>病虫害(ネグサレセンチュウ類)</p> <p>病害(萎凋病、葉かび病、半身萎凋病、青枯病、トマトモザイクウイルス(ToMV))</p> <p>病虫害(うどんこ病、オオタバコガ、アザミウマ類)</p> <p>病虫害(褐色根腐病、萎凋病、ネコブセンチュウ類)</p> <p>病虫害(根腐疫病、ネコブセンチュウ類)</p> <p>病虫害(青枯病、萎凋病、ネコブセンチュウ類)</p> <p>害虫(コナジラミ類)</p> <p>害虫(オオタバコガ)</p> <p>病虫害(トマト黄化えそウイルス(TSWV)、コナジラミ類、アザミウマ類)</p> <p>病虫害(キュウリモザイクウイルス(CMV)、アブラムシ類)</p>

	<p>(UVカットフィルム)</p> <p>(光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○マルチ栽培技術</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p>	<p>病害虫(灰色かび病、トマト黄化えそウイルス(TSWV)、キュウリモザイクウイルス(CMV)、アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類)</p> <p>雑草、病害(疫病、灰色かび病)</p> <p>害虫(オオタバコガ)</p>
<p>その他の留意事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・深層の土壌改良も含め、深層施肥に努める。 ・排水不良地では青枯病の発生を招きやすいので、排水対策を十分行う。 ・ハウス栽培では、前作で施用した肥料とその施用量を考慮して、施肥計画を立てる。 	

(20) きゅうり

○ 県下全域

根が好気性で、通気性の良い土壌を好むため、たい肥の施用等により土壌理化学性の改善を図り、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせで、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は連作の回避、防虫網の設置、マルチ栽培等の耕種的防除、生物農薬の利用、発生予察情報の利用及び自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 3～4 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○点滴かん水同時施肥を行う。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術 (天敵、微生物剤等の利用)</p> <p>○抵抗性品種・台木の利用技術</p> <p>○熱利用土壌消毒技術(太陽熱)</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○光利用技術(非散布型農薬含有テープ) (粘着資材) (シルバーマルチ) (UVカットフィルム) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織 ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病虫害(灰色かび病、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、ウリノメイガ等)</p> <p>病害(つる割病)</p> <p>病虫害(つる割病、ネコブセンチュウ類)</p> <p>病虫害(うどんこ病、アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(コナジラミ類)</p> <p>害虫(コナジラミ類)</p> <p>病虫害(キュウリモザイクウイルス(CMV)、アブラムシ類)</p> <p>病虫害(灰色かび病、キュウリモザイクウイルス(CMV)、菌核病、アブラムシ類、コナジラミ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類)</p> <p>雑草、病害(べと病、炭疽病)</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・病虫害防除は、発生予察情報を活用して、適期防除、散布回数の削減に努める。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。 	

(21) なす

○県下全域

有機質に富む耕土の深い肥沃な土壌を好むことから、たい肥の施用等により土壌理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は連作の回避、マルチ栽培等の耕種的防除、生物農薬の利用及び自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 2～4 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○点滴かん水同時施肥 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 (天敵、微生物剤等の利用) ○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイオーツ等の利用) ○抵抗性品種・台木の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(非散布型農薬含有テープ) (黄色灯) (粘着資材) (シルバーマルチ) (光反射資材(光反射シート、光反射資材繊維ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 病虫害(灰色かび病、オオタバコガ、アブラムシ類、ハダニ類等) 病虫害(ネグサレセンチュウ類) 病害(半身萎凋病、半枯病、褐色腐敗病、青枯病) 害虫(ハダニ類、アザミウマ類) 害虫(コナジラミ類) 害虫(オオタバコガ) 害虫(コナジラミ類、アザミウマ類) 害虫(アブラムシ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウマ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類) 雑草, 病害(灰色かび病、菌核病)
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・排水不良地では、根腐病、青枯病の発生を招きやすいので、排水対策を十分行う。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。 	

(22)かぼちゃ

○県下全域

過湿に弱く、また根圏域が広いことから、たい肥の施用等により土壌理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は連作の回避、疫病常発地では抵抗性品種の選択等の耕種的防除、生物農薬の利用、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病害(うどんこ病)</p> <p>害虫(アブラムシ類)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・定植期が4月中旬～4月下旬の作型では、被覆栽培(トンネル栽培)を行う。 ・マルチ栽培では、窒素施肥量を減肥する。 	

(23)いちご

○県下全域

たい肥の施用等による土壌理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は連作の回避、無病株の使用、葉かきや枯葉の除去、株元の通気性の改善等の耕種的防除、生物農薬の利用及び自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○土耕栽培では、完熟たい肥10a当たり 4～5 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○点滴かん水同時施肥を行う。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 (天敵、微生物剤等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○土壌還元消毒技術 (ハウス栽培等) ○熱利用土壌消毒技術 (太陽熱) (熱水・蒸気) ○光利用技術 (非散布型農薬含有テープ) (粘着資材) (シルバーマルチ) (光反射資材 (光反射シート、光反射資材交織ネット等) の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○フェロモン剤利用技術 (露地栽培) ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 病虫害 (灰色かび病、うどんこ病、アザミウマ類、ハダニ類等) 病害 (炭疽病、萎黄病、黒斑病、萎凋病) 病虫害 (うどんこ病、灰色かび病、アザミウマ類) 病害 (萎黄病、根腐病) 病虫害 (萎黄病、ネグサレセンチュウ類) 害虫 (ネグサレセンチュウ類) 害虫 (コナジラミ類) 害虫 (コナジラミ類、アザミウマ類) 害虫 (アブラムシ類) 害虫 (アブラムシ類、アザミウマ類) 害虫 (アブラムシ類、アザミウマ類) 害虫 (オオタバコガ、ヨトウガ、ハスモンヨトウ) 雑草、病害 (炭疽病、菌核病)
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。	

- ・促成・半促成栽培はハウスやトンネルを利用し、温度管理・日長管理により徒長・過繁茂を防ぐ。
- ・十分な排水対策を行う。
- ・親株の更新による無病苗の利用を図る。
- ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。

(24) ピーマン

○県下全域

乾燥に弱く、また過湿害も受けやすいので、たい肥の施用等により土壌の排水・保水性を高めるとともに、肥効調節型肥料等の施用の組み合わせにより、施肥効率と収量の向上を図る。

また、雑草防除は機械除草やマルチ栽培、病虫害防除は連作の回避、排水対策等の耕種的防除、生物農薬の利用及び自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2～4 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。	
化学肥料 低減技術	○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○点滴かん水同時施肥を行う。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術 (天敵、微生物剤等の利用) ○抵抗性品種・台木の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(非散布型農薬含有テープ) (黄色灯) (粘着資材) (シルバーマルチ) (UVカットフィルム) (光反射資材(光反射シート、光反射 資材交織ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術	雑草 病虫害(灰色かび病、オオタバ コガ、アブラムシ類、ハダニ類 等) 病害(トウガラシマイルドモツ トルウイルス(PMMoV)) 害虫(アザミウマ類、オオタバ コガ) 害虫(コナジラミ類) 害虫(オオタバコガ) 害虫(コナジラミ類、アザミウ マ類) 病虫害(キュウリモザイクウイ ルス(CMV)アブラムシ類) 病虫害(キュウリモザイクウイ ルス(CMV)アザミウマ類、アブ ラムシ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウ マ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウ マ類) 雑草、病害(灰色かび病、菌核 病)
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス栽培では、湿度を低くし、炭疽病、灰色かび病の発生抑制に努める。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。 	

(25) えだまめ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、被覆栽培やマルチ栽培等の耕種的、物理的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 1 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用する。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○対抗植物利用技術 (クロタラリア等の利用)</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>○被覆栽培技術(不織布トンネル栽培等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病害虫(ダイズシストセンチュウ)</p> <p>病害虫(モザイク病、アブラムシ類)</p> <p>害虫(ヨトウムシ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(ハスモンヨトウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・病害虫防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(26) さやえんどう

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努め、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。また、機械除草による除草剤の削減を基本として、被覆栽培やマルチ栽培等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○熱利用土壌消毒技術(太陽熱) ○光利用技術(シルバーマルチ) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培) ○マルチ栽培技術 	<p>雑草</p> <p>病害虫(灰色かび病、うどんこ病、ヨトウガ、アザミウマ類等)</p> <p>病害(うどんこ病)</p> <p>病害(苗立枯病)</p> <p>病害虫(モザイク病、アブラムシ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>害虫(ヨトウムシ類、アザミウマ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(ヨトウガ、ハスモンヨトウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・転換畑では、排水対策を十分に行う。 ・連作は避ける。 	

(27) さやいんげん

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、被覆栽培やマルチ栽培等の耕種的、物理的、生物的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ)</p> <p>(光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病害虫(灰色かび病、アザミウマ類等)</p> <p>病害虫(モザイク病、アブラムシ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類、アザミウマ類)</p> <p>害虫(ヨトウムシ類、アザミウマ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(ハスモンヨトウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・転換畑では排水対策を十分に行う。また、ハウス栽培では前作の肥料を考慮して施肥計画を立てる。 ・連作は避ける。 	

(28) こまつな

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つため、たい肥の施用技術を基本とし、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等により、施肥効率向上と収量の維持を図る。

また、機械除草、生物農薬の利用、被覆栽培、フェロモン剤利用等の耕種的、物理的、生物的防除、自らの観察を基にした病虫害防除により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり 2～3 t を基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入する。 合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用する。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用)</p> <p>○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイオーツ等の利用)</p> <p>○抵抗性品種の利用栽培</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ) (UVカットフィルム) (光反射資材(光反射シート、光反射資材 織ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病虫害(軟腐病、コナガ、アオムシ、ヨトウムシ)</p> <p>病虫害(ネグサレセンチュウ類)</p> <p>病害(萎黄病、白さび病)</p> <p>害虫(アブラムシ類)</p> <p>病虫害(黒斑病、アブラムシ類)</p> <p>害虫(アブラムシ類)</p> <p>害虫(コナガ、アオムシ等)</p> <p>害虫(コナガ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。 	

(29) チンゲンサイ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用技術を基本とし、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草、生物農薬の利用、被覆栽培、フェロモン剤利用等の耕種的、物理的、生物的防除、自らの観察を基にした発生初期段階における病虫害防除の徹底等入により農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 2～3 tを基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○対抗植物利用技術(マリーゴールド、ヘイオーツ等の利用) ○抵抗性品種の利用技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○光利用技術(シルバーマルチ) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○フェロモン剤利用技術 ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 病虫害(軟腐病、コナガ、アオムシ、ヨトウムシ) 病虫害(ネグサレセンチュウ類) 病害(萎黄病、白さび病) 害虫(アオムシ、コナガ、ヨトウムシ) 害虫(アブラムシ類) 害虫(アブラムシ類) 害虫(コナガ、アオムシ等) 害虫(コナガ) 雑草
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・他のアブラナ科野菜との連作は避ける。 ・ハウス栽培では、前作の肥料を考慮して、施肥計画を立てる。 	

(30) そらまめ

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に努めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本とし、被覆栽培やマルチ栽培等の耕種的防除の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階での病虫害防除の徹底等により、農薬使用回数を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○完熟たい肥10a当たり3 tを基本として施用する。</p> <p>○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。</p> <p>○肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。)</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	<p>○機械除草技術</p> <p>○光利用技術(シルバーマルチ) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織ネット等)の設置)</p> <p>○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等)</p> <p>○フェロモン剤利用技術(露地栽培)</p> <p>○マルチ栽培技術</p>	<p>雑草</p> <p>病虫害(モザイク病、アザミウマ類、アブラムシ類) 害虫(アブラムシ類)</p> <p>害虫(ヨトウムシ類、アブラムシ類)</p> <p>害虫(シロイチモジヨトウ)</p> <p>雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・転換畑では、排水対策を十分に行う。 ・連作は避ける。 	

(31) 食用ぎく

○県下全域

土壌の物理的、化学的及び生物学的性質を良好に保つために、たい肥の施用等による土壌理化学性の改善に務めるとともに、化学肥料を低減するため肥効調節型肥料等の使用により、施肥効率と収量の向上を図る。

また、機械除草による除草剤の削減を基本として、生物農薬の利用や被覆栽培等の積極的な導入、自らの観察を基にした発生初期段階における病害虫防除の徹底等により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。 ○緑肥作物を導入した、合理的な輪作体系を組む。緑肥作物の選定と、そのすき込み時期・腐熟期間に注意する。 	
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥を畦施用し、追肥を側条に行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。) 	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 ○生物農薬利用技術(微生物剤等の利用) ○光利用技術(シルバーマルチ) (光反射資材(光反射シート、光反射資材交織 ネット等)の設置) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○フェロモン剤利用技術(露地栽培) ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 雑草 病害虫(灰色かび病、うどんこ病、オオタバコガ等) 害虫(アブラムシ類) 害虫(アブラムシ類、アザミウマ類) 害虫(ヨトウムシ類、アブラムシ類) 害虫(オオタバコガ、ヨトウガ、ハスモンヨトウ) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・水田転換畑では、排水対策を十分に行う。 	

4 果樹

(1) りんご

○県下全域

りんご園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病虫害防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本として、生物農薬の利用、有袋栽培の導入、フェロモン剤の利用により殺虫剤の使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する。 ○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。	
化学肥料 低減技術	○局所施肥を行う。（樹冠下施用） ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合を含む。）	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術 ○生物農薬利用技術（B T剤の利用） ○抵抗性品種の利用技術（「彩香」、 「さんさ」） ○天然物質由来農薬利用技術 ○被覆栽培技術（有袋栽培） ○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤の利用） ○マルチ栽培技術（稲わら、剪定枝チップ等の利用）	雑草 害虫（ハマキムシ類、シャクトリムシ類） 病害（黒星病、斑点落葉病） 害虫（リンゴハダニ、ナシマルカイガラムシ、ナミハダニ） 害虫（モモシンクイガ） 害虫（ハマキムシ類、シンクイムシ類等） 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 	

- ・粗皮削り、バンド巻き等耕種的防除の徹底を図る。
- ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。
- ・稲わら、剪定枝チップは紋羽病が多発している園地では土壤にすき込まない。
- ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。

(2) ぶどう

○県下全域

ぶどう園の土壌管理は、樹列間の牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病虫害防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本として、雨除け栽培等の耕種的防除の組合せにより、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6 tを基本として施用する。</p> <p>○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥を行う。（樹冠下施用）</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害
	<p>○機械除草技術</p> <p>○被覆栽培技術 （雨除け栽培、袋かけ、かさがけ）</p>	<p>雑草 病害(灰色かび病、晩腐病)</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・休眠期の粗皮削り、架線の巻きひげや成り跡、被害枝の剪去、発病果粒や発病果房の摘除、園地内の排水や通風の向上を図る等、病虫害の密度低減を図るための耕種的防除を徹底する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(3) おうとう

○県下全域

おうとう園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病虫害防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本として、灰星病対策のため、雨よけ施設を積極的に導入する。樹勢衰弱をもたらすコスカシバ対策ではフェロモン剤の積極的活用により、殺虫剤の使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6 tを基本として施用する。</p> <p>○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥を行う。（樹冠下施用）</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害
	<p>○機械除草技術</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○被覆栽培技術（雨除け栽培）</p> <p>○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤等の利用）</p>	<p>雑草</p> <p>害虫(ウメシロカイガラムシ、ハダニ類)</p> <p>病害(灰星病、炭疽病)</p> <p>害虫(コスカシバ)</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・園地の清掃、粗皮削り、ミイラ果の摘み取りなど耕種的防除を徹底するとともに、風通しの良い樹形づくりに努める。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持に必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(4) 西洋なし

○県下全域

西洋なし園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病虫害防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本とする。モモシクイガ、輪紋病対策としての有袋栽培の導入やフェロモン剤の積極的な活用により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する。</p> <p>○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥を行う。（樹冠下施用）</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害
	<p>○機械除草技術</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○被覆栽培技術（有袋栽培）</p> <p>○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤等の利用）</p>	<p>雑草 害虫（リンゴハダニ） 病虫害（輪紋病、モモシクイガ） 害虫（ハマキムシ類、シクイムシ類等）</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・輪紋病の伝染源となるいぼ病斑の削り取りや胴枯病の罹病枝の切り取り等耕種的防除を徹底する。 ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(5) 日本なし

○県下全域

日本なし園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病害虫防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本にする。モモシクイガ、輪紋病対策としての有袋栽培の導入やフェロモン剤の積極的な活用により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6 tを基本として施用する。</p> <p>○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥を行う。（樹冠下施用）</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫
	<p>○機械除草技術</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○被覆栽培技術（有袋栽培）</p> <p>○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤等の利用）</p>	<p>雑草 害虫（リンゴハダニ） 病害虫（輪紋病、モモシクイガ） 害虫（ハマキムシ類、シンクイムシ類等）</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・輪紋病の伝染源となるいぼ病斑の削り取りや胴枯病の罹病枝の切り取り等耕種的防除を徹底する。 ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。 	

(6) もも

○県下全域

もも園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病虫害防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本にする。モモシンクイガ、灰星病、せん孔細菌病対策としての有袋栽培の導入、樹勢衰弱をもたらすコスカシバ対策としてのフェロモン剤の積極的活用により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6 tを基本として施用する。 ○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。	
化学肥料 低減技術	○局所施肥を行う。（樹冠下施用） ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害
	○機械除草技術 ○天然物質由来農薬利用技術 ○被覆栽培技術（有袋栽培） ○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤等の利用）	雑草 病害(縮葉病、黒星病、せん孔細菌病) 病虫害(灰星病、せん孔細菌病、黒星病、モモシンクイガ) 害虫(コスカシバ等)
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・縮葉病の被害葉を摘み取り、防風網の設置、被害枝や被害果の除去等、病虫害の密度低減を図るための耕種的防除を徹底する。 ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。 ・病虫害防除にあたっては、発生予察情報を活用した、適期防除と散布回数削減に努める。 	

(7) うめ

○県下全域

うめ園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病害虫防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本にする。樹勢衰弱をもたらすコスカシバ対策としてのフェロモン剤の積極的活用により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6 tを基本として施用する。</p> <p>○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥を行う。（樹冠下施用）</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術（B T剤の利用）</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤の利用）</p>	<p>雑草</p> <p>害虫（ハマキムシ類）</p> <p>病害虫（縮葉病、黒星病、かいよう病、カイガラムシ類）</p> <p>害虫（コスカシバ）</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・かいよう病の罹病枝の切り取り等耕種的防除を徹底する。 ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。 	

(8) すもも（日本すもも・プルーン）

○県下全域

すもも園の土壌管理は、牧草草生、完熟たい肥及び苦土を含んだ石灰質肥料の施用を総合的に組み合わせることにより、土壌浸食の防止、塩基類の溶脱抑制、土壌理化学性の改善を図り、地力を維持・増進する。

化学肥料は、地力に応じた施用を行うとともに、樹冠下（局所）施用及び有機質を含む肥料の施用により使用量の削減を図る。

雑草防除は、機械除草により除草剤の使用回数の削減を図る。

病虫害防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本にする。モモシンクイガ、黒斑病対策としての有袋栽培の導入、樹勢衰弱をもたらすコスカシバ対策としてのフェロモン剤の積極的活用により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	<p>○毎春、樹冠下に、完熟たい肥10a当たり0.6 tを基本として施用する。</p> <p>○牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する。</p>	
化学肥料 低減技術	<p>○局所施肥を行う。（樹冠下施用）</p> <p>○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）</p>	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害
	<p>○機械除草技術</p> <p>○生物農薬利用技術（B T剤の利用）</p> <p>○天然物質由来農薬利用技術</p> <p>○被覆栽培技術（有袋栽培）</p> <p>○フェロモン剤利用技術 （交信攪乱剤等の利用）</p>	<p>雑草</p> <p>害虫（ハマキムシ類）</p> <p>病虫害（黒斑病、ウメシロカイガラムシ）</p> <p>病虫害（黒斑病、灰星病、モモシンクイガ）</p> <p>害虫（コスカシバ、スモモヒメシンクイ）</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・牧草は産草量が低下すれば、施肥又は更新する（は種後5～6年）。牧草の更新時には所定量の石灰質肥料を施用する。 ・土壌の適正酸度を維持するために必要な苦土を含んだ石灰質肥料を施用する。 ・交信攪乱剤は、設置面積が小さいと効果が劣るので、地域ぐるみで設置する。 	

5 花き

(1) キク

○県下全域

土壌の理化学性を良好に保つため、たい肥等有機質資材施用を基本とし、化学肥料使用量の低減を図る。

さらには、栽培中の土壌分析による追肥量の適正化を図る。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、苗による持ち込みの防止、初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努めるとともに、病害虫防除は、発生予察情報、自らの観察を基にした適正な薬剤散布を基本とし、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○点滴かん水同時施肥（養液土耕） ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○天然物質由来農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術(熱水・蒸気) ○光利用技術(シルバーマルチ) (UVカットフィルム) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術 (通路マルチ等を含む) 	<p>病害虫(白さび病、アザミウマ類、オオタバコガ、ハモグリバエ類、ハダニ類)</p> <p>病害虫(半身萎凋病、立枯病、ネグサレセンチュウ類)</p> <p>害虫(アザミウマ類)</p> <p>害虫(アザミウマ類、アブラムシ類、ハモグリバエ類)</p> <p>害虫(アザミウマ類、アブラムシ類、ハモグリバエ類、食葉性害虫等)</p> <p>病害(白さび病)、雑草</p>
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(2) バラ

○県下全域

土耕栽培ではたい肥等有機質資材の施用による土壌の理化学性の改善を進めるとともに定植前の土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化及び土壌や土壌溶液等の分析による追肥量の適正化を図る。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、苗による持ち込みの防止、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○新植時に、深さ60～80cmに掘り下げた植え床へ完熟たい肥10a当たり6tを基本として施用し、以後は2tの施用とする。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○抵抗性台木の利用技術(台木用ノイバラ) ○天然物質由来農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術(熱水・蒸気) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術(敷きわら等)	病害(疫病) 病害(うどんこ病) 病害(根頭がんしゅ病) 害虫(アザミウマ類、アブラムシ類、食葉性害虫等) 病害(灰色かび病、べと病等)、雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・同化専用枝の蕾はアザミウマ類の発生源となるので、開花前に摘み取る。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(3) トルコギキョウ

○県下全域

栽培に当たっては、たい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図る。また、塩類過多による生育障害が発生していることなどから土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、苗による持ち込みの防止、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○熱利用土壌消毒技術(熱水・蒸気) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術	病害虫(青かび根腐病、根腐病、茎腐病、ネコブセンチュウ類) 害虫(アザミウマ類、アブラムシ類、ハモグリバエ類、食葉性害虫等) 病害(灰色かび病)、雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(4) カーネーション

○県下全域

たい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図るとともに定植前の土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、苗による持ち込みの防止、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○点滴かん水同時施肥（養液土耕） ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 （完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。）	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○抵抗性品種の利用技術 （品種カタログ等参照） ○熱利用土壌消毒技術（熱水・蒸気） ○光利用技術（シルバーマルチ） ○被覆栽培技術 （ハウス栽培での防虫網の設置等） ○マルチ栽培技術	病害（萎凋病） 病害虫（茎腐病、萎凋病、 ネコブセンチュウ類） 害虫（アザミウマ類） 害虫（アザミウマ類、オオタ バコガ、食葉性害虫等） 病害（斑点病、黒点病等）、 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(5) 宿根カスミソウ

○県下全域

比較的連作になりやすいことから、たい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図るとともに土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、苗による持ち込みの防止、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 3 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○天然物質由来農薬利用技術 ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での網虫網の設置等) ○マルチ栽培技術	害虫(ハダニ類) 害虫(ハモグリバエ類、食 葉性害虫等) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施肥量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(6) ユリ

○県下全域

たい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図るとともに土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、自らの観察を基にした初期防除の徹底、防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) (雨よけ栽培) ○マルチ栽培技術	害虫(アザミウマ類、アブラムシ類、食葉性害虫等) 病害(葉枯病等) 病害(葉枯病等)、雑草
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。	

(7) アルストロメリア

○県下全域

近年、栽培が拡大している品目であり、3～4年は同じ場所で栽培されることから、たい肥や緑肥による土壌の膨軟化を進めるとともに、定植前の土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、新たな侵入害虫等の発生が見込まれることから、苗による持ち込みの防止、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○新植時に、深さ50cm程度の全層へ、完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用し、深耕する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術(敷きわら等)	害虫(アブラムシ類、ヨトウムシ類) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施肥量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(8) デルフィニウム

○県下全域

栽培に当たっては、直根性であることから深耕とたい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図るとともに土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を図る。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 2 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	<ul style="list-style-type: none"> ○抵抗性品種の利用技術 (エラータム系品種) ○天然物質由来農薬利用技術 ○熱利用土壌消毒技術(熱水・蒸気) ○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術 	<ul style="list-style-type: none"> 病害(うどんこ病) 病害(うどんこ病) 病害(立枯病) 害虫(食葉性害虫等) 病害(灰色かび病)、雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(9) グラジオラス

○県下全域

乾燥に弱いことからたい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図るとともに土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、自らの観察を基にした初期防除の徹底、防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 3 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術	害虫(アザミウマ類、アブラムシ類、食葉性害虫等) 雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

(10) リンドウ

○県下全域

水田転作畑等で栽培が増加しており、露地栽培が主体の品目である。同一株を4～5年利用して切り花生産となること、細根が地表近くに多く分布し、有機質を好む性質を有することから、たい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図る。

また、土壌分析に基づく土壌改良、施肥量及び追肥量の適正化を進める。

さらに、新たな侵入害虫等の発生が見込まれることから、マルチ栽培、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、自らの観察を基にした病虫害防除により、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり2 tを基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○機械除草技術 ○マルチ栽培技術(敷きわら等)	雑草 病害(葉枯病)、雑草
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。	

(11) スターチス

○県下全域

一年草と宿根草に大別され、近年は宿根タイプの種間交雑によるハイブリッドの導入が進んでいる。ハイブリッドタイプは株を3～5年程度据え置いて栽培することから、導入に当たってはたい肥等有機質資材の施用による土壌の膨軟化を図るとともに土壌分析に基づく土壌改良、施肥量の適正化を進める。

また、生育に応じた追肥を必要とすることからEC等の土壌分析に基づき追肥量を決定する。

さらに、ミカンキイロアザミウマ等の侵入害虫や新病害虫の発生が多くなっていることから、自らの観察を基にした初期防除の徹底、防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等
	○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術	害虫(アザミウマ類、食葉性害虫) 病害(灰色かび病)
その他の 留意事項	・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。	

(12) カンパニュラ

○県下全域

ハウスの跡作利用として栽培が増加してきており、栽培に当たっては、たい肥施用による土壌の膨軟化を図るとともに土壌分析に基づく、施肥量の適正化を図る。

また、新たな侵入害虫等の発生が見込まれることから、自らの観察を基にした初期防除の徹底、ハウス入口・サイドへの防虫網等の設置や収穫後のほ場残さの適正な処分、周辺雑草の除去等総合的な防除に努め、農薬使用回数の削減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	
有機質資材 施用技術	○完熟たい肥10a当たり 3 t を基本として施用する。	
化学肥料 低減技術	○肥料を畦施用する。 ○施用する窒素分量のうち、3割以上を有機質由来の肥料とする。 (完熟たい肥施用により化学肥料施用を削減する場合も含む。)	
化学合成農 薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等
	○被覆栽培技術 (ハウス栽培での防虫網の設置等) ○マルチ栽培技術	害虫(アブラムシ類、ミカンキイロアザミウマ等) 病害(菌核病)、雑草
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・たい肥の施用量は稲わらたい肥の場合の目安である。他のたい肥を施用する場合は、その種類・成分等により量を調整する。 ・ハウス内の湿度を低くし、病害の発生抑制に努める。 ・土壌分析に基づき、基肥量及び追肥量を決定する。 	

第4 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項等

1 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

①完熟たい肥の施用

未熟なたい肥は、農作物の生育を阻害したり、病虫害発生の原因となる場合もあるので、たい肥は完熟したものを施用する。

②土壌分析に基づく施肥

適切な施用を行うためには、地域県民局地域農林水産部等の指導を受けることが適当である。このため、地域県民局地域農林水産部や農協における土壌診断施設の積極的な活用を図るものとする。

持続性の高い農業生産方式の導入に当たってはこのような土壌診断施設等の活用を図るとともに、施肥量の決定等に関し、地域県民局地域農林水産部等から診断結果を踏まえたアドバイスを受け、土壌の性質改善と施肥の合理化に努めることとする。

③きめ細かな施肥の実施

局所施肥を的確に実施するためには、施肥機による肥料繰り出し量の調節等が技術的に重要となるので、これらに注意してその導入を図る必要がある。

また、肥効調節型肥料の利用に当たっては、肥効発現の速度が異なるものが多数流通しているため、地域県民局地域農林水産部等の指導により、栽培する農作物の吸肥特性に合致した肥料を選択する必要がある。

④発生予察に基づく防除

持続性の高い農業生産方式の円滑な実施のためには、病虫害防除所からの精度の高い予察情報の提供が重要である。このため、持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者が要防除水準を適切に設定できるよう、予察情報の精度を向上させるとともに、本県が設置・運営している農業情報ネットワーク等により、これらの情報が農業者に的確に伝達されるような体制を強化する。

持続性の高い農業生産方式の導入に当たっては、このような発生予察情報を有効に活用するとともに、それに基づく生物農薬等による防除の効果的な実施に関し、地域県民局地域農林水産部等による巡回指導を活用する等適宜アドバイスを受けることが重要である。

2 その他必要な事項

①地力増進対策指針に基づく必要な事項

「地力増進対策指針」が定められている地域において持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、作土の厚さの確保、pHの調整など同対策指針の内容に即した改善方策を行うことが必要である。

②必要な機械、資材等及び資金の調達

持続性の高い農業生産方式の導入には、新たな作業機械や資材等を整備する必要があることがある。これらの機械・資材は、慣行の生産方式の実施に用いるものと比較して、高価であるだけでなく、その利用に関しても高度な技術が要求されるものであることから、個々の農業者の経営内容や技術水準を見極めつつ、導入を図ることが肝要である。

また、これらの農業機械、資材等を整備する場合には、取組みの初期段階における経営的な負担の軽減を図る観点から、地域県民局地域農林水産部等の指導を受け、必要に応じ、県による無利子貸付資金である農業改良資金やその他の融資制度を積極的に活用することが適当であ

る。

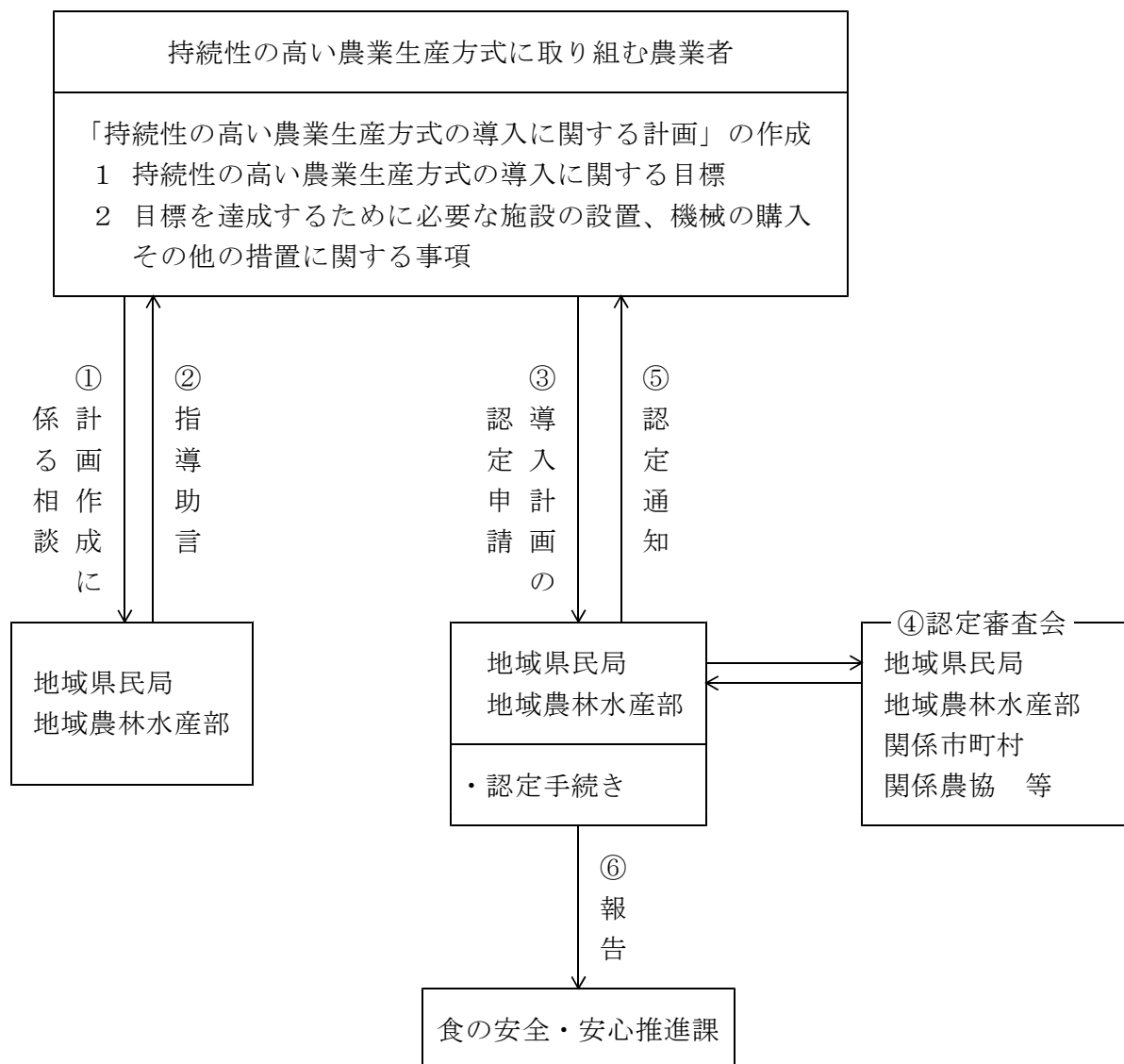
③関係補助事業の積極的な活用

持続性の高い農業生産方式に地域全体で取り組む場合には、たい肥舎等共同利用施設の建設による生産条件の整備等を推進することが肝要となることから、これらを総合的に実施するため、必要に応じ、関係補助事業を積極的に活用することが適当である。

④廃棄物等の適切な処理

持続性の高い農業生産方式に取り組む農業者は、環境への負荷軽減に配慮した生産活動を積極的に実践すべきものであることから、作物生産に伴って発生する使用済プラスチックや稲わら等の作物残さ等については、その排出抑制や有効活用等に努めるとともに、処分する場合は、関係法令に基づき適正に行うものとする。

第5 「持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画」の認定手続き
「持続性の高い農業生産方式の導入に関する計画」の認定手続きは、以下のとおりとする。



附則

この指針は、平成12年3月22日から施行する。

附則

この指針の一部改正は、平成17年1月20日から施行する。

附則

この指針の一部改正は、平成18年3月17日から施行する。

附則

この指針の平成21年2月4日付け一部改正は、平成21年4月1日から施行する。

附則

この指針の一部改正は、平成26年7月29日から施行する。

附則

この指針の一部改正は、平成29年5月15日から施行する。